

【氏名】藤岡 由佳

【所属】(助成決定時) 神戸大学大学院 法学研究科

### 【研究題目】

日本の対米パブリックディプロマシー(広報・世論外交)

— 戦前・戦後・冷戦後における在米日系移民との関わりから考察する —

### 【研究の目的】

「移民国家」米国では、移民達が祖国とのつながりを保ち、時にはその国益を代弁するロビー活動が盛んに行われる。翻って今日の日本ほど、在米日系移民との関わりの希薄な国家は珍しいと言えよう。なぜ、両者の関係は遠いのか。

本研究では、戦前、戦後を通し、日本政府と在米日系移民との関わりの軌跡を追う。そして、その特徴や問題点を検証し、課題を提示する事により、今後の日米関係に寄与する事を社会的目的とする。

又、本研究が戦前の研究対象の中心とする一九三〇年代は、日系移民史研究において、あまり触れられる事なかった研究年代である。それゆえ、この時期における両者の関わりを明らかにする試みにより、日米関係史の新たな局面に光を投ずる事を学術的目的とする。

### 【研究の内容・方法】

実証主義を基本に、日本と米国で調査研究を実施した。研究対象時期が戦前から冷戦後まで長期にわたる為、時期により一次史料へのアクセスを含め、実行可能な研究方法が異なる。従って、筆者の社会科学(政治学)と人文科学(歴史学)両方の学術分野における訓練も活かし、研究方法は双方のメソッドを取り入れたハイブリッド方式を採択した。

即ち、戦前から戦中については、日本と米国のアーカイブ(外務省外交史料館、米国国立公文書館など)における一次史料の発掘とその分析を、主な研究方法とした。一方、戦後については、日米両国(サンフランシスコとロスアンゼルスを中心にカリフォルニア州全域、ワシントンDCと、メリーランド州とバージニア州など周辺地域、ニューヨーク市、東京)で直接、あるいは電話でのインタビューを研究方法の中心とした。その他、情報公開法を基に、外務省や米国連邦政府に行政文書の公開を申請し、入手文書の分析を実施した。さらに、日系市民団体と共同で日系人の対日観を探る意識調査や、二次史料の収集と分析を行った。

インタビューは、日米関係にこれまで影響力を及ぼしてきた、あるいは大きく関わってきた在米日系人に、政治家、実業家、学者、退役軍人などの中から要請した。日本人側のインタビュー先は、主に日系人関係を担当してきた政府高官や、日米間のビジネスにおいて日系人と深く関わった実業家などに依頼した。その結果、研究計画を作成した当初に予定していた相手先の大半から承諾と協力を得て、インタビューを実施する事ができた。

さらに、アーカイブにおける一次史料の発掘の過程で、これまで日本では知られていなかった、

日系人収容に関するフランクリン・ルーズベルト大統領の極秘覚書を入手する事にもつながった。  
(十二月三日付、神戸新聞四面国際総合、産経新聞七面国際に掲載)。

#### 【結論・考察】

在米日系移民と日本政府の交流の軌跡を、およそ百年のスパンで検証してみると、その歴史の濃淡が浮き彫りになる。そしてその濃淡には、両者の相互認識が少なからず影響を及ぼしてきたことは見過ごせない。

本研究では、日米関係に深く関わってきた在米日系移民の対日観と、日系人と接してきた日本政府の高官やビジネスパーソンなどを中心に、日本人の日系移民観を浮き彫りにし、その相互認識の推移と理由の解明を試みた。調査の結果、在米日系移民の対日観は、世代や家庭環境を含め複合的な要因により形成されている為、多様であり、決して一枚岩では語れない事が明らかとなった。同時に、日系移民の心理の底流で共有されている、ファンダメンタルな対日スタンスも確認する事ができた。一方、日本政府側の日系移民観にも、その底辺で共通性を見出す事ができ、相互認識の根底で日米関係が大きく左右してきたことは、ほぼ間違いないと思われる。